情感性と自己感――アンリからスターンへ――

伊原木 大祐

Affectivity and the Sense of Self: from Michel Henry to Daniel N. Stern

IBARAGI Daisuke

問題提起※

ミシェル・アンリによる「情感性」概念の詳細な規定は、主著『現出の本質』の第四章（第四セクション）に見いだされる。このセクションの冒頭にあたる第 52 節では、第三セクションの議論の道筋が簡略に示されたあと、「自己触発（auto-affection）」の本質が「情感性＝触発性（affectivité）」であることが告げられ（EM, 577）、これがさらに、「自己自身を自ら感じること（se sentir soi-même）」としての「自己感情（sentiment de soi）」として定義される（EM, 578）。このような意味での情感性は、自己触発の「理論的ないし思弁的な可能性」ではなく、「具体的な可能性」なのだと言われている。だが、アンリがそこから展開している情感性に関する記述は、本論最後の第 70 節で明かされる「受苦」と「享受」の絶対的連関という啓示構造の説明も含め、やはりまだ「思弁的」で、どこか空疎な理論にとどまっているような印象を与える。

本発表では、この概念をより具体化し、拡張し、場合によっては改変するために、精神分析家のダニエル・スターンが 1980 年代に提起していた「自己感（sense of self）」の議論を導入してみたい。スターンの記念碑的著作『乳児の対人世界（The interpersonal world of the infant）』（1985）は、乳児の主観的経験を再構成するなかで、自己感の形成という観点から人間の発達過程を記述している。もちろん、そこにはアンリの思想から著しく乖離する要素がある。しかしながら、いくつかの点で類似が見られるというのもまた事実である。スターンの発達理論に訴えることで、自己感情ないし自己感受としての情感性に対する別の視点、さらにはアンリが「共‐パトス」と呼んだものの具体的な実効性にまでアプローチすることが可能となる。

１．アフェクトの具体性

『乳児の対人世界』の基本的前提は、「何らかの自己感が自己意識（self-awareness）や言語よりずっと前から存在している」（IWI, 6）というものである。ここで言われる「感 sense」とは、「（自己反省的でない）単純意識（simple awareness）」を意味しており（IWI, 7）、何ものかについての反省的な「概念」、「認識」、「意識（awareness）」といったものから区別されている（IWI, 71）。要するに、自己感は「認知的構成物」ではないとされる。スターンはこのセンスを「概念レベルでなく、直接経験のレベルで」（IWI, 7）語ろうとする。

乳児の主観的生を見直すこの語りにおいて、とりわけわれわれの目を引くのは、最初期の「全面的な自他未分化」といった、よくある心理学的想定が覆されている点である。スターンは、マーラーの発達理論における生後 4〜5 か月頃までの「未分化期」――母子融合の時期――という仮説を否定し、分離した「自己」とその「自己感」、さらには自己と異なる他者を感じる「他者感」などが、誕生の当初から成立していることを強調した（IWI, 69-70）。この考え方には、生の素朴な非人称性や「生における個体の解消」（I, 259）を認めず、あくまで「自己性」としての情感性を重視したアンリの姿勢に通じるものがある。

では、スターンのいう自己感とは、具体的にどのようなものなのか。再版序文での微修正（Stern, 2000）を度外視するならば、当初考えられていた発達プロセスは以下のように区分される。誕生後の「新生自己感」、生後２〜６ヵ月に始まる「中核自己感」、７〜１５ヵ月で形成される「主観的自己感」、生後２年経って言語を獲得した頃に生じる「言語自己感」の４つである。このそれぞれが、外部に対する「かかわり合い（relatedness）」の領域をそれ固有の仕方で展開しながらも、地層のように段々と積み重なって自己性を形成してゆくモデルとなる。これらの自己感は一度形成されると、生涯にわたって機能しつづけると考えられている。自己感の発達は、「かかわり合い」を通じた外部環境からの影響によって阻害されることもありうるが、以下ではそうした非標準的な事象（病理例を含む）の分析については括弧に入れておく。

最早期にあたる新生自己感から始めよう。「新生自己（emergent self）」とは文字通り、ちょうど出現し芽生えつつある自己のことである。それは、行為や情動の統一性・連続性・特異性を担う明瞭な「中核自己」へと成長する以前の自己を指している。自己組織化を開始したばかりの赤ん坊が対象となるため、その内的意味の把握自体はきわめて困難であるが、にもかかわらず現在、この時期を観察した心理学者たちの知見には事欠かない。スターンはその蓄積を利用しつつ、新生自己感（および新生他者感）の形成過程から、無様式知覚・相貌知覚・生気情動知覚という３つの能力を取り出している。いずれもが「直接的・『包括的』な知覚形式」（IWI, 60）であり、このうちもっとも基礎的かつ普遍的と

考えられるのは「無様式知覚」であるが、とくにアンリ思想との関連で言うと、後二者の知覚がより示唆的である。

第一の「無様式知覚」とは、「一つの感覚様式（one sensory modality）で受容された情報を取り出し、それを何らかの仕方で別の感覚様式に移し変える」生得的な能力である（IWI, 51）。別の言い方をすれば、知覚の「様式交差的な」流動性のなかで現れる能力である。これは、ピアジェ以降の発達心理学の成果（Bower, 1974; Meltzoff, 1981）を踏まえた標準的な考えであるが、たとえば乳児において、目に見える乳房（視覚）と吸う乳房（触覚）とが統合的に経験される場合などに目立つ。いわゆる「共感覚（synesthesia）」の現象にも関わる論点である（IWI, 154-155）。ここでは、乳児がある感覚の「抽象的表象」を作り、それを別様式の感覚に変換するという考えが援用されている。そうした発想は、いくらかの変更を加えれば『見えないものを見る』の抽象絵画論に接続することもできようが、それが表象概念の脱-立を前提とするかぎりにおいて、アンリ的な生の理解からは逸れていくものだろう。

これに対し、第二の「『相貌』知覚（“physiognomic” perception）」は、情動と深く結びついた別種の無様式知覚と考えられている。この考えを提起したウェルナーによると（Werner, 1948: 67-82）、子どもは知覚に際して、数や形といった「幾何学的-技術的な」性質を把握するのとは異なる様式――「主体の運動的-情動的な（motor-affective）態度」――によって対象を把握しているという。そこでは、線であれ、色であれ、音であれ、いかなる様態の刺激も一定の情緒や気分（喜びや悲しみや怒りなど）へと変換される。ウェルナーは、こうした把握が人の表情に関わる経験から生じると考え、これを「相貌」知覚と呼んだ。スターンによれば、ここで働く情動はいわば「超様式的な通貨」として作用し、「あらゆる知覚作用の（通常は無意識的な）構成素」（IWI, 53）となっている。

続く第三の特性として浮かび上がってくる「生気情動（vitality affect）」の知覚という問題は、アンリの自己触発論を考え直すうえで有意義である。一般にわれわれが感情経験を持ち出すとき、そこでは不連続なカテゴリーが想定されている。喜び、悲しみ、怒り、恥、驚き、不安といったものは、生体の内部でたえず働く恒常的運動ではなく、それぞれに始まりと終わりをもつ特殊なカテゴリーを構成する。こうした感情はその特殊性と短期性からして、人間の「生」を根底から基礎づけるものとはなりえない。生きている最中にあっても、喜び、悲しみ、怒り、恥、驚き、不安といった特殊感情をまるで「感じていない」時間帯もありうるからである（むしろ多くの場合がそうだろう）。しかし、それらの感情の有無にかかわらず、生体に影響を及ぼしている持続的な感情もある。それは呼吸、空腹、排泄、睡眠、覚醒などの契機に湧出するものであり、「押し寄せる」、「あせてゆく」、「爆発的な」、「次第に強まる」、「次第に弱まる」、「噴出する」といった様態で感じられる生命力の感情である（IWI, 54）。これをスターンは、ダーウィン以来の古典的な感情類型である上述の「カテゴリー的情動」から区別し、「生気情動」と名づけた。スター

ン自身が後になって示唆したように（Stern, 2000）、生気情動はダマシオのいう「背景的感情（background feelings）」に近いものと考えられる。

生気情動については、二つの特徴が重要になる。第一に、生気情動はカテゴリー的情動の不在時にも作動しているが、カテゴリー的情動と協働することも多々ある。生気情動の基礎には、時間の流れに伴う内的強度の変化パターン、つまり「活性化輪郭（activation contours）」が認められる。この見地からすると、呼吸におけるテンポの推移も、喜びにおける強弱の変化も、等しく生気情動の枠組みで捉えられる。第二に、乳児は生気情動の諸性質を、自分のものとして内側から経験するばかりでなく、これらを他人の振る舞いのうちにも経験できるという。乳児による他者情動の経験様式は、「特定の感情内容（a specific content of feeling）ではなく感じ方（a way of feeling）」の表現に重きを置いた「ダンス」や「音楽」の鑑賞に喩えられている（IWI, 56）。

> 実際のところ、乳児は最初から大人がするように、目に見える行為をそのようなものとして知覚するわけではないということが容易に想像できる。〔……〕むしろ、乳児は直接的に知覚し、諸行為が表現する生気情動という観点からそれらを分類し始める、という可能性のほうがはるかにありそうなことである。大人にとってのダンスと同じように、乳児の経験する社交の世界は、形式的行為の世界であるより前に、主として生気情動の世界なのだ。（IWI, 56-57）

生気情動の議論は、一方で、アンリの自己触発論に新たな光を当てる。アンリによる「情感性」は、情感的な限定態、すなわち「何らかの個別的感情の個別的内容」に還元されるものではなかった（EM, 581-582）。情感性は、すべての感情をそのつど可能にするものとして働いている自己感情であるかぎり、カテゴリー的情動の枠では説明しきれない。実際、情感性の本質を構成するという「苦悩」と「歓喜」は、その見かけに反して、カテゴリー的情動がもつ経験的個別性や偶然性から切り離されており、存在構造のうちに刻み込まれた純粋な可能性としての「存在論的調性〔気分〕」と定義されている（EM, 834）。アンリが言うように「被ることの苦悩とその享受のうちに、われわれのすべての感情の潜在的可能性がある」（EM, 838）のだとすれば、その情感性はカテゴリー的情動の「どれか一つ」ではなく、むしろその母胎であると言ったほうが適切だろう。だが、その場合、情感性は超越論的な「本質」や「形相」として自己の内部に居座る空虚な概念のように見えてくる。個別の感情（カテゴリー的情動）を実際に経験していないとき、つまり喜びや悲しみ、怒りや驚きといったものをとくに感じていないとき、私はいったい何を感じているのか。そうした状況にあってもなお、私が「自己」を感受しているのだとすれば、そしてその自己感情こそが「苦悩にして歓喜」なのだとすれば、この種の存在論的あるいは超越論的な情感性は、実際の経験を介していかに実現するのか。このとき、生体内部で絶え間

なく変動する「生気情動」という考えは、妥当な選択肢のひとつになる。このような情動の内的感知は、アンリ的な純粋自己触発の具体相をなすと言ってもよい。

他方で、第二の論点となる他者情動の経験という問題は、アンリ的な「共‐パトス」の原始形態として解釈することができる。「パトス的共同体」という構想の提示に先立って一つのモデルとなった母子関係の記述を、アンリの『実質的現象学』第三章から引用しておこう。「子は、自分の母を自分の母として知覚しないのと同じく、自分のことを子として知覚してはいない。それというのも、そこで子が自らを自分の母の子として覚知できるような地平が、まだ起ち上げられていなかったからである」（PM, 171）。このような「として」理解の不可能性は、とりわけ乳児に関しては自然なことであるが、それでも乳児は母親を何らかの仕方で認知している。スターンは、乳児が「新生他者」を経験するプロセスに、無様式知覚と生気情動が関わることを示唆していた。母親が一定のテンポとリズムで赤子を「よしよし」と言いながら撫でる場合、赤子の側では、その発話（「よしよし」）を受け取る聴覚と、愛撫を受け取る触覚とが感覚上の種別を超えて、「同じ生気情動の経験」へと結実する。このとき、乳児が経験するのは、「なだめるという活動におけるたった一つの生気情動」であり、それは「なだめる生気情動の母（soothing vitality affect mother）」である（IWI, 58-59）。ここでは、「母親」という役割意味の知覚ではなく、なだめるという行為において現れた「生気情動」の受容が問題となっている。そうした受容のありかたは、後述する情動状態の間主観的な共有へと発展してゆく。

２．自己形成と間主観性の問題圏

（１）中核自己における表象の役割

新生自己感の時期に自己組織化を開始した乳児は、生後２～７か月になると、行動と情動において他とは異なる一貫した「自己」を形成するようになる。そこで成立する感覚が「中核自己感」（および「中核他者感」）である。この自己感は、以下４つの基本的な自己経験（self-experiences）によって構成されているという（IWI, 71）。（１）自分の行為が他者の行為と異なり、自分の意志によって発動することを感じる「自己発動性（self-agency）」。（２）境界をもった身体的存在として自分が単一で一貫性をもつという「自己一貫性（self-coherence）」。（３）感情のパターン化された諸性質を自己不変要素（self-invariant）として経験する「自己情動性（self-affectivity）」。（４）自分の経験の時間的連続性を感じる「自己史（self-history）」。最後の経験に見られる情動経験の連続性は、乳幼児精神分析のもう一人の大家ロバート・エムディの言葉を借りて（Emde, 1983）、「前表象的自己」における「情動中核（affective core）」とも言い換えられる。いずれにせよ、このうちどれか一つでも欠けると、人は重篤な精神病に陥ってしまう。４つの特徴すべてを併せ持った中核自己感は、その後に展開してゆく精巧な自己感の「基礎」となっている。

中核自己感の強固な自己統一性に着目するならば、自己が自己との関係を断ち切ることができない情感性の絶対的統一性という、アンリの主張にも近づけることができそうだが、逆にスターンによる中核自己感（および他者感）の記述は、アンリがたびたび槍玉にあげる「表象」による自己構成を中心的な主題としている。スターンにとって、中核自己の発動性・一貫性・情動性・連続性を統合してゆくのは、エピソード記憶である。乳児は外界との交流を経験するなかで、そのつど特定のエピソードを編み上げる。とりわけこの交流において決定的なのは、スターンのいう「自己を調節する他者（self-regulating other）」――乳児の自己経験を調節する養育者――の役割である（IWI, 102）。この自己調節的他者は乳児をケアすることで、乳児側の空腹や覚醒を調節できるばかりでなく、その内部にさまざまなカテゴリーや強度の情動を引き起こすこともできる。こうして形成された個別のエピソードに関する記憶の集積は、乳児において、やがて類似した複数のエピソード群へとまとまって、ある種のプロトタイプを形成するようになる。つまり、「一般化された」エピソードの記憶が作り出されるのである。もともと乳児は「情報を前言語的に抽象化し、平均化し、表象する諸能力」をもつことが知られている（IWI, 97）。このため、他者との相互作用の経験から乳児が編み上げたエピソードも、いまだ言語を用いない仕方で平均化され、表象化されるのである。こうして出来上がった表象のことを、スターンは「RIGs（Representations of Interactions that have been Generalized 一般化された相互作用表象）」と呼び、これが中核自己表象の基本単位になると指摘する。

この RIGs は、スターンによれば「経験されるがままの多様な現実の直接的刻印（the direct impress）から生じる」（IWI, 98）ものである。だとすれば、アンリが際立たせていた内在的「印象」という論点を経て、その源泉としての自己印象性の問いへ、「生の超越論的情感性におけるその『受動情念（passion）』」（I, 86）へと遡行することもできるだろう。しかし、スターンはその方向に進まず、以下のように議論を進める。

> 自己を調節する他者と共にあるという経験は、次第に RIGs を形成する。そしてこれらの〔RIG の〕記憶は、RIG の諸属性のひとつがあれば、いつでも取り戻すことができる。ある乳児がある一定の感情をもつとき、その感情は、この感情を一属性とするような RIG を思い起こさせるだろう。このように諸々の属性は、生きた経験を再活性化するための想起への手がかりなのである。そしてある RIG が活性化されると、それはいつでも、元来の生きた経験がもつ効力のいくらかを、活発な記憶の形に詰め込むのである。（IWI, 110）

RIG の基盤には情動的な相互作用の経験があるため、その想起は、RIG の一属性でもある何らかの感情に依拠することがある。この事態は、アンリがたびたび論じるような、表象（R）に先行するアフェクトの根源的性格を示しているように見える。しかし、ここで強調されているのは、そのように成り立つ RIGs から乳児が活発な記憶を引き出しうるのだ

という、表象の機能的地位である。別の言い方をすれば、生の経験に対する RIGs からのフィードバック機能が問題となっている（「生から表象へ」ではなく「表象から生へ」の運動）。RIGs はアンリ的に言えば「脱-立」、生の外在化の効果とも解釈しうるため、その場合には情動と異質な性格をもつものと言えようが、スターンによるその記述には、当然のことながら「志向性」や「地平」、「脱自」といった用語はいっさい使われていない。スターンのアイデアをアンリ思想の枠内で維持するには、この RIGs という概念をいわゆる地平内部での現象としての「表象」から引き離して考えることが必要かもしれない。

（２）間情動性における情動調律の役割

７～９ヵ月に入ると乳児は、心の認知という点で飛躍的発展を遂げる。こうして成立するのが「主観的自己感」であり、この自己感は新たに「間主観的かかわり合い」の領域へと入っていく。中核自己感と中核他者感のかかわり合いが、自他の物理的・感覚的区別を担保していたのに対し、間主観的かかわり合いの領域では、自他それぞれの主観的状態、すなわち「心（mind）」の区別、さらにはその共有が可能となってくる（IWI, 124-5）。こうして乳児は、言葉がまだ話せない段階にありながらも、注意や意図（志向）を大人たちと共有することができるようになる（「間注意性（inter-attentionality）」・「間意図性（interintentionality）」）。しかし、われわれがここで注視すべきは、情動状態の共有を意味する「間情動性（interaffectivity）」の現象である。というのも、この現象は、先ほど引き合いに出したアンリの「共-パトス」論をより具体的に裏付けるための手がかりを与えてくれるからである。

スターンによれば、間情動性とは、「主観的経験を共有する場合に最初の、もっとも普及した、もっとも直接的に重要な形式」（IWI, 132）である。そのため、乳児にとっては「情動の交換（affective exchange）」こそが、「母親とのコミュニケーションの主たる様態にして実質」（IWI, 132）となる。このような交換が親子の間で生じたと言えるためには、以下のような条件が求められる。①親は乳児の行動からその感情状態を読み取ることができねばならない。②そのうえで親は乳児から読み取った状態に対応した行動をとらねばらない。③乳児がその親の行動から、自分自身の当初の感情経験に関係あるものを読み取ることができねばならない。このうち主として①から②にかけての行動様式をスターンは「情動調律（affect attunement）」と呼んだ。その一例のみを引用しておく。

・十ヵ月の女の子が、母親とお決まりの遊びごとをした後で母親のほうを見る。女の子は顔を開いて（つまり口をあけ、両眼を見開き、眉を上げて）から、もとの顔に戻る。この一連の変化による輪郭は滑らかなアーチで表すことができる。母親は「そうなのね Yeah」という言葉に抑揚をつけ、音量が段々大きくなって小さくなるように上げて下げる調子で「Ye∩ah」と答える。母親の韻律上の輪郭が子どもの顔

の動きの輪郭とマッチしたのである。（IWI, 140-141――ただし、原文の記号を一部省略・変更している。）

見落とすべきでないのは、母親による調律行為がたんなる「模倣」でないという点である。母親は子の顔の動きを形式的に、つまりロボットのようにまねて同じ顔の動きをしたのではなく、その動きに込められた感情状態の運動（喜びや楽しさの情動および生気情動）を、声の運動（抑揚）に変換して再現しているのである。先に新生自己感の知覚を検討するなかで問題となったように、ここでも「無様式知覚」に加え、「生気情動」に特有の性格である輪郭の表れ――強さ、リズム、テンポ、タイミング、持続といったものが重要になってくる。このとき情動調律は、「内的状態の正確な行動表現を模倣することなく、共有された情動状態を感じる際の質を表現する行動の遂行」（IWI, 142）と定義される。分かりやすく言えば、外的形式の模倣的反復ではなく、内的状態の共有から生じるクリエイティブな表現方法が、この「調律」なのである。これは、アンリが提起した情感的な他者感受を実効化する様式のひとつと考えてよいのではないだろうか。

スターンは、自身が行ったビデオ録画による母子観察を根拠に、こうした情動調律のさまざまなケースを挙げ、分析している。この調律は概して無自覚に行われるものであるが、その後の母親へのインタビューとそこからの推論によって、「なぜ調律を行うのか」という疑問に対する答えも明らかになっている。スターンによると、その「唯一最大の理由」とは「乳児『と共にあること』、『～と共有すること』、『～に参与すること』、『～の仲間に加わること』」である（IWI, 148）。乳児への介入や操作ではなく、また親側の意図の伝達でさえなく、ただ乳児の情動状態へのマッチングによって共同性を確立することが、そこでは目指されている。この調律のありかたは「共同化調律（communing attunement）」という語で示される。

しかし、以上の説明では、間情動性の実在を確認することはできない。情動調律として挙げられた複数の観察例はすべて、母親側の調律行動を記録したものでしかなく、その際に乳児側がこの調律を本当に感じ取っていたという事実（上述③のプロセス）を示すものではない。事実、乳児側の感知を記録動画から確認することは、かなり難しいようである。なぜなら、たいていの場合、母親の共同化調律があっても、乳児は「あたかも何も特別なことは起きなかったかのように行動する」（IWI, 149）からである。この調律はそもそも、乳児の遊びや振る舞いのパターンに合わせていくものであるため、それを受容したとしても乳児が以前と変わらぬ仕方で行為しつづけるのは当然だと言える。では、どうやって乳児側の調律受容を確認することができるのだろうか。

そこで用いられるのが、「誤調律（misattunement）」である（IWI, 148-149）。誤調律とは、乳児の内的状態にマッチしない形での調律のことであり、意図的なものと非意図的なものとに区分される。後者（「真の誤調律」）は、母親が乳児の感情をいわば「読み違える」ことに由来する場合や、その感情状態を自らのうちに見いだせない場合に生じる。こ

れに対し、前者の意図的誤調律は、一定の目的をもった誤調律であり、端的に「微小調律（tuning）」とも呼ばれる。ちょうど音の高さをチューニングするように、母親が赤ん坊の行動レベルや情動レベルを上下に微修正する目的で、わざとマッチングを過剰にしたり、過小にしたりすることである。スターンは、このチューニングを実験的に利用して乳児の反応を見ることで、乳児による情動反応の能力を推察できると考えた。

指示を受けて観察室に入った母親はまず、生後九ヵ月の子どもがおもちゃで遊ぶとき、その腕の動き、強さ、速さにうまく合わせて、その子のおしりを揺さぶるという情動調律を実行する（IWI, 150）。この場合に乳児から特別変わった反応はない。リズムを崩すことなく遊び続けるだけである。しかし、それに続いて、揺さぶりを子の喜びのレベルより弱くゆっくり行うと、赤ん坊は突然遊びを止め、母親のほうを振り返って見つめたという。過剰に揺すった場合も、同じような中断があった。スターンによると、マッチングの破綻とそれに続く動揺の例は、「乳児がマッチングの程度に対する何らかの感覚を実際にもつ」（IWI, 151）ことを示している。これは間情動性——内的感情の共有——が親子間で成り立っていることのひとつの証左であると考えられよう。

結論

ここでは、『乳児の対人世界』第二部の最後に登場する「言語的自己感」の分析、さらにまた分析治療につながる応用的な第三部「いくつかの臨床的含意」の箇所を考慮することなく、あくまでアンリ思想の具体化という見地から、スターンの「自己感」論を取り上げてきた。これによって少なくとも二つのアイデアに焦点が当てられた。第一のものは、アンリによる純粋自己触発の実効化としての情感性がカテゴリー的情動だけでなく、生気情動にも浸透しているという仮説である。事実、カテゴリー的情動の非連続性を考慮するならば、生の自己感受においては、生気情動の果たす役割の方がはるかに大きいものと考えられる。他方でまた、アンリが言うように「あらゆる共同体はその本質からして情感的＝情動的である」（PM, 175）とすれば、それゆえ他者経験が「まずもって情感的＝情動的」（I, 346）なのだとすれば、人格相互の関わりにおいても「情動 affect」の問題が中心を占めるはずである。こうして提示された第二のものが、アンリの「共‐パトス」——生の〈基底〉を通じた他者とのパトス的共同関係——をスターンの「間情動性」に重ね合わせ、その典型的な実効様態として「情動調律」の現象を主題化する、という着想であった。4つの自己感がそれぞれに展開する「かかわり合い」の領域は、各々に固有の形成期をもっているが、それらは一度形成されると、「社会生活と自己を経験する別個の形式として永久に残り続ける」（IWI, 32）とされる。だとすれば、ここで扱った調律の問題は、狭小な親子関係に限定されたものでなく、より広い情感的共同体の分析にも応用することができるだろう。また、この観点から、『精神分析の系譜』で示されたようなアンリ現象学と精神分析との不幸な関係に多少の変化をもたらすことができるかもしれない。

（※本研究は JSPS 科研費 23K00008 の助成を受けたものである）

※ 凡例・文献表

略号等の引用表記に関しては下記を参照。邦訳に依拠して主要概念の訳語をほぼ踏襲しているが、基本的には発表者自身による訳出であり、適宜変更した訳語もある。

・Henry, M.

(EM). *L'essence de la manifestation*, PUF, coll. «Épiméthée», 1990.（北村晋・阿部文彦訳『現出の本質』上・下，法政大学出版局，2005 年．）

(I). *Incarnation. Une philosophie de la chair*, Seuil, 2000.（中敬夫訳『受肉――〈肉〉の哲学』法政大学出版局，2007 年．）

(PM). *Phénoménologie matérielle*, PUF, coll. «Épiméthée», 1990.（中敬夫・野村直正・吉永和加訳『実質的現象学――時間・方法・他者』法政大学出版局，2000 年．）

・Stern, D. N.

(IWI). *The interpersonal world of the infant: a view from psychoanalysis and developmental psychology*, New York: Basic Books, 1985.（小此木啓吾・丸田俊彦監訳; 神庭靖子・神庭重信訳『乳児の対人世界　理論編』岩崎学術出版社，1989 年．）

(2000). *The interpersonal world of the infant: a view from psychoanalysis and developmental psychology*, First Paperback Edition. New York: Basic Books.

・その他の文献

Bower, T. G. R. (1974). *Development in infancy*, San Francisco: W. H. Freeman.

Damasio, A. R. (1994). *Descartes' error : emotion, reason, and the human brain*, New York: Quill.（田中三彦訳『デカルトの誤り――情動、理性、人間の脳』ちくま学芸文庫，2010 年．）

Emde, R. N. (1983). "The prerepresentational self and its affective core," in *The Psychoanalytic Study of the Child*, 38, pp. 165–192. https://doi.org/10.1080/00797308.1983.11823388

Meltzoff, (1981). "Imitation, intermdal co-ordination and representation in early infancy," in *Infancy and epistemology: an evaluation of Piaget's theory*, edited by George Butterworth, Brighton, Sussex: Harvester Press, pp. 85–114.

Werner, H. (1948). *Comparative psychology of mental development*, Chicago; New York: Follett.（鯨岡峻・浜田寿美男訳『発達心理学入門――精神発達の比較心理学』ミネルヴァ書房，1976 年．）